

起業家精神 大学で育成

崇城大ラボ
開設10年目

学域超え活動 3社設立

起業家精神（アントレプレナーシップ）を育てることを目的にした崇城大の「アントレプレナーシップラボ」。日本で初めて大学公認の部活動「起業部」として開設されて、10年目を迎えた。現在の顧問は、資生堂でヘアケアやスタイリング製品の研究・開発に携わり、数々のヒット商品を手がけた「超実践派」の川副智行教授（55）。川副教授は「起業家を生み出すだけでなく、社会に貢献する人材育成の場としても強化してしていきたい」と意気込む。

「水は通さないけど風は通すレインウェアは需要があると思う」「紙飛行機が好きなんだけど、ここから何かアイデア広げられないかな」。

5月下旬、キャンパス内のラボの部室。約30人が集まり、本年度取り組むテーマを決めるためのグループディスカッションが開かれていた。部長を務める工学部ナノサイエンス学科3年の川村悠理亜さん（20）は「他学部の人と議論しながら、アイデアを形にしていける」と活動の魅力を語る。

川村さんは昨年、3人のメンバーとともに挑んだ同大と県主催のビジネスプランコンテストで優勝。乗用車に乗り込みやすくなるように改良した車いすのアイデアで、賞金50万円を手にした。現在も商用化の可能性を探り、研究に励む。

同部は生物生命学部や情報学部、芸術学部など毎年40〜60人の学生が在籍する。週1回ほど集まり、それぞれが起業につながる企画を考案。4、5人ほどのグループディスカッションを通して精度を高めていく。県内外で実施されてい

るビジネスプランコンテストへの出場が目標の一つだ。

これまでに約150人の学生が「起業家メソッド」を学び、実際に3社が設立された。起業する学生は大学の施設を無償で利用できるメリットがある。

光合成細菌の培養キットを製造販売するベンチャー企業「Ci amo（シアモ）」は2018年に誕生。昨年度、初めて黒字化を達成し、軌道に乗りつつあるという。

昨年12月に「P&A」を起業した大学院修士2年の中畑敏哉さんは、植物プランクトンの増殖技術を確認。健康食品やバイオ燃料生産への活用に取り組む。

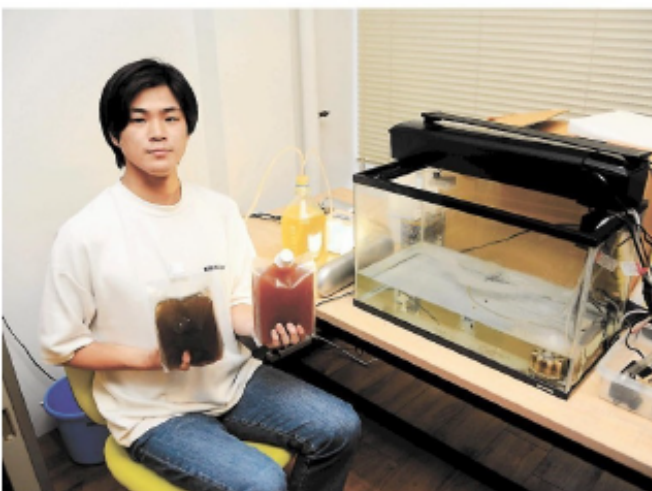
「全く知識がなかった経営面でも教授たちからの確かなアドバイスがもらえる。新しいことにチャレンジしやすい環境で、起業へのハードルが低い」と中畑さん。

同大理事を務める中山泰宗准教授は「まさに学域を超えたオープンイノベーションの場。視察に訪れる自治体や企業と、学生がコラボした事業も生まれ、結果的に大学の知名度向上にも役立っている」と評価する。

川副教授は資生堂時代、商品の研究・開発にとどまらず、髪の毛の手触りを客観的に数値化するセンサーを開発するなど、従来のなかった新たな領域を開拓してきた。学生たちには「チャレンジして経験を増やすことが、自らの独創性を高めることにつながる」と訴える。昨年12月には、起業そのもののより、起業家精神を重視しようと、現在の名称に変更した。



川副智行教授（中央）の指導を受けながらグループディスカッションをする学生たち＝熊本市西区



昨年12月に起業した崇城大院修士2年の中畑敏哉さん。植物プランクトンの増殖技術を確認した＝熊本市西区

「起業するまでに必要な企画立案や事業説明のプロセスは、会社員や公務員など社会人として活躍する上でも必要なこと」と川副教授。「これらのスキルを高めることで、起業家に限らない将来の選択肢を増やしてほしい」と力を込める。

（樋口琢郎、石井楓樹）